

# Whooops!

2018 SUMMER Vol.19

TAKE  
FREE!



多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ発行

特別対談 赤坂真理×安藤礼二

## 「天皇と女性」

「芸術」と「医療」  
稲葉俊郎

生命の樹を上れ!

多摩美の四季

ミケランジェロの彫り姿

ハーパーリウム 標本に植物の美を見る  
発見! 「絵本ではつくりくつるぎカフエ」  
不定期連載 師の言葉 室越健美



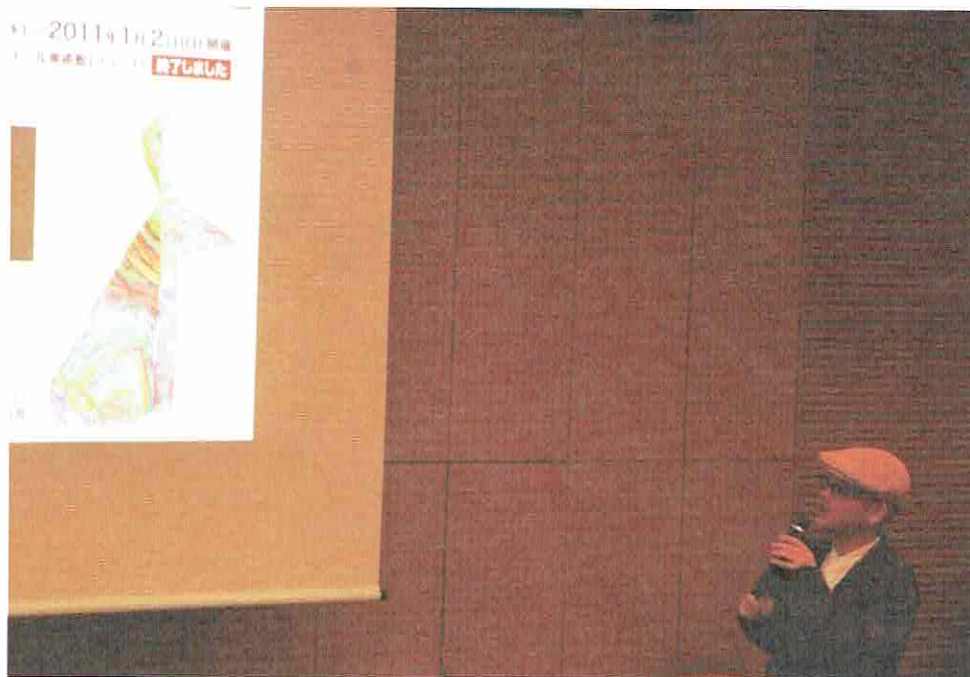




# 「芸術」と「医療」は深いところでつながっている

稲葉俊郎さん(東京大学医学部附属病院・循環器内科助教)

東京大学医学部附属病院・循環器内科助教の稲葉俊郎さんが、5月26日に本学科の授業「21世紀文化論」のゲスト講師として招かれた。タイトルは『生きること 芸術と医療』。芸術と医療という二つの分野は一見すると別の次元にあるように感じるかもしれない。しかし、両者は深いところでつながっており、稲葉さんはその接点を探究しているという。



アール・ブリュットについて話す稲葉さん

「人間の全体性を取り戻す営みという意味で医療と芸術は同じだと思っています」

講義の冒頭で稲葉さんは医療と芸術の接点とは何かを語った。人間は生きていくだけで「全体性」を失っていく。それを取り戻す手段が医療や芸術なのだという。人間が60兆から100兆個もの細胞から成り、臓器など身体のエユニット化した細胞を動かすことで生命を運営しているということは忘れられやすく、病気になることで初めて身体のことを意識する。これが「全体性を失っている」ということだ。

体の複雑化に伴って心も複雑化した結果、心は「意識」と「無意識」に分かれた。西洋ではこの二つをはっきりと分けて考える一方で、東洋では表層意識と深層意識がグラデーションのようにつながっていると考える傾向にあるという。意識は内側と外側、つまり睡眠と覚醒のリズムを持つことでバランスを保ち、夢や瞑想はその二つをつないでいる。そこには「本当の芸術が存在している」と稲葉さんは言う。

次に、「身心一如」という興味深い言葉が紹介された。「からだ」と「こころ」はもと

も同じで直結しているということだ。人の心は「あたま」、すなわち脳にあると思われがちだが、それは「偽のこころ」だ。覚醒時には本物の心と頭の間蓋のようなものがある状態になっている。睡眠時にそれが取れ、心と頭がつながると夢を見るという仕組みなのだという。

また、人間はしばしば葛藤を起す。葛藤はよくない状態とされるが、実際は「いいことだ」と言う。二つの対立したものが意識できるからだ。その安易な解決法が片方を無意識に押し込む「抑圧」で、抑圧されたものは「影」となりマイナスのレッテルを貼られやすくなる。そして影が精神症状や身体症状として表れたり、他者に投影して認識されたりしてしまう。これでは解決にはならない。では真の解決法とは何か。それは一つ上の次元から認識することだという。対立関係にあるものは片方がプラス、もう片方がマイナスではなく、両方にプラスとマイナスの側面がある。矛盾は同居できるということを認識するのが真の解決になるという。人間の意識は構造化されており、それは常に改変される。これが「成長」だ。ユングが晩年に建てたボー

リングンの塔はまさにそれを表している。

西洋医学は病気を「治す」ものとされる。しかし、人間は「治る」力を持っている。これを高めるのが芸術なのだ。「生(き)の芸術」とされるアール・ブリュットは発表を目的とせず、「治る」力を高める自分のための芸術だ。それだけでなく、他者に感動や衝撃を与えて癒すことにもなりうる。

岡本太郎は、『今日の芸術』という本で絵を描くことが本能の欲求かつ生命の喜びであると述べている。東田直樹の詩や文は、自閉症ゆえに難しいコミュニケーションを取る手段になっており、その中に深い思考が見えてくる。ここからも、芸術が生命の営みであり、心を表現するものであることが窺える。

現代は医療が進歩している一方でストレス社会でもある。だからこそ、芸術によって癒され、時に人を癒すことが求められるのではないか。

取材・文・撮影・レイアウト＝板垣万由子



## 稲葉俊郎(いなば・としろう)

医師。東京大学医学部附属病院循環器内科助教。1979年熊本県生まれ。心臓の治療を専門としている。著書に『いのちを呼びますもの一ひとのごころとからだ』(アノニマ・スタジオ)など。また、絵画も制作している。



Whoops! 見聞記

# 生命の樹を上れ！

今年3月から《太陽の塔》内部の公開が始まった。大阪で開かれたかの日本万国博覧会から48年。半世紀の歳月を経て、岡本太郎の思い描いた「祝祭」への扉が再び開かれた。その全貌に迫るべく、大阪府吹田市の万博記念公園を訪れた。

「《太陽の塔》って男と女のどっちだと思う？」

大阪モノレール万博記念公園駅行きのモノレール車内からは、そびえ立つ《太陽の塔》を周囲から見渡すことができる。その道中、同行していた友人にこう尋ねられたのだ。一拍置いて「女かな」と答えた。太陽に生命を育むエネルギーのようなイメージがあって、それが何だか母のようだと感じたからだ。友人も同じ考えだったらしく、「気が合うね」と微笑まれた。

3月23日の昼下がり、かねてより念願の万博記念公園の地に降り立った。目当てはもろろん、1970年の日本万国博覧会から48年ぶりとなる岡本太郎の《太陽の塔》内部の公開。大阪在住の友人が奇跡的に二人分の枠を勝ち取ってくれたのである。清々しい快晴で、建築基準法の関係で30分に80人しか一度に塔内に入れないので、ゆったり見ることができる。まさしく絶好の鑑賞日和だった。

今まではネットの画像でしか見たことのない《太陽の塔》が目の前にあった。想像以上に胴はどっしりとしてたくましい。頭の片隅に「肝っ玉かあさん」という単語がフツと浮かんだ。塔の根元部分に設けられた入り口から中に一歩踏み込むと途端に日差しが途切れ、黒塗りの空間が広がった。これより先は撮影禁止のエリアだ。緊張が足元よりはい上がってくる。

最初の展示空間は、世界各地の民族の仮面に囲まれて「地底の太陽」が鎮座していた。言葉では形容しがたい奇怪な音が反響し、時折「地底の太陽」の表面に血のように赤い手形がベタァッ！と浮かび上がる。かと思うと、無数の棒人間がワラワラと湧き出て来る。最新技術によって再現される万博の地下展示の世界観。その場にいた観客全てが固唾を呑み、その有様を見つめていた。

そしていよいよ、待望の「生命の樹」の根本へと足を踏み入れた。怪しい色をした謎のイ

キモノがうごめいている。「樹」の根元に張り付いた三葉虫の群れは、今にもカサカサとい出しそうだ。

「そこにサンリがいるんですけど、見えにくい位置にあるので注意して見てくださいねー」

いかにも浪速の兄ちゃんといった陽気な感じの若い男性ガイドに導かれるまま、樹の周りをぐるりと取り囲む階段を登る。真紅のささくれ立った壁に厳かに響き渡る重低音のメロディ。何だかゲームの主人公になった気分だった。冒険の果てに魔王の棲む宮殿にたどり着き、この世界の真実、すなわち人間の正体を目にするのだ。自然と階段を踏み締める足に力が入った。

樹の周りにいたのは、爬虫類や哺乳類をはじめ図鑑の中で馴染みの生き物。何の変哲もない生命の進化の過程だが、違うのは、鑑賞者がその群れの中に紛れ込んで、共に上を目指していることだった。正直、今まであんなに奇妙な生物と人間が同じ海から生まれ出た細胞でできているなどという話は、今ひとつピンと来なかった。だが、こうして一本の樹に集結し、共に上を目指すこの空間には、奇妙な一体感のようなものがあった。世界スケールの大きな珍道中、といったところか。

いよいよ、猿人がたむろするゾーンに突入した。この壮大な旅も終盤だ。

「人間が頂点にいないのがいいね」と友人が呟いた。木の先端は塔の頂点に達してなお、すくすくと際限なく伸びていくようだった。ちょうど塔本体が万博開催時に丹下健三の建築の大屋根をボカんと打ち破ったように。階段を上りきった後は、かつて空中展示へと続いていた腕の中を覗き込む。むき出しの鉄骨が張り巡らされた未来への路だ。まさしく、太古と今、そして先の見えない未来が塔の中で一つに溶け合った瞬間だった。ここに来る前に友人と交わした談義を思い出す。《太陽の塔》はまさしく「女」だった。《太陽の塔》という母胎が産み落とした生き物は幾多の生と死を、い



のちの循環を繰り返しながら一本の樹をはい登る。自分はまさにその旅の一員だったのだと、あの原色の赤で満たされた世界を思い浮かべるたびに実感する。

「あれ見たらもうかわいいって言えないね」「まさかあの中にあんなもん生やしてるとはね…」

帰りのモノレールの中、遠くなっていく《太陽の塔》をぼんやりと眺めた。

「《太陽の塔》、満を持して21世紀に復活」

当初はこんなイメージを抱いていた。とんでもない。むしろ「脱皮」という言葉のほうがしっくりくる。渦巻くような激しい力を包み込んだまま、あの塔は黙して機を窺っていたのだ。

生前、太郎が万博に託した思い、すなわち万博を古代より受け継がれてきた「祝祭」の場に作りかえ、近代化に揉まれた日本人たちが見失ってしまった生命の歓びを再び呼び起こす試みは、人々に受け入れられることなく不発に終わっていた。しかし、意気消沈することはない。こうして太郎のリベンジの年がやってきたのだから。なお、猿人たちの集いの中にシメシメと皆の様子をうかがう太郎の姿を探していたのは内緒である。

取材・文・撮影(\*1)・レイアウト＝豊島瑠南





《太陽の塔》の内部。「生命の樹」がそびえ立つ様子は圧巻(写真提供=大阪府)



「地底の太陽」とずらりと並ぶ民族仮面 (写真提供=大阪府)



《太陽の塔》の腕を中から見ると… (写真提供=大阪府)

《太陽の塔》  
大阪府吹田市千里万博公園

「太陽の塔内部公開」(予約制)

オフィシャルサイトより予約申し込みができる  
<http://taiyounotou-expo70.jp>

★関連情報★

企画展『太陽の塔への道』  
2018年5月30日～10月14日  
岡本太郎記念館 (東京都港区南青山 6-1-19)

企画展『太陽の塔』  
2018年9月15日～11月4日  
あべのハルカス美術館 (大阪市阿倍野区阿倍野  
筋 1-1-43 あべのハルカス 16階)

映画『太陽の塔』  
監督：関根光才 配給：パルコ  
2018年9月29日から渋谷・シネクイント、新  
宿シネマカリテほか全国で公開